



京都学派教育学から読み解く「生産性」

門前, 斐紀

(Citation)

日本教育学会第80回大会・ラウンドテーブル：糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話：領域横断による読み解き

(Issue Date)

2021-08-25

(Resource Type)

conference object

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008545>



日本教育学会第80回大会
ラウンドテーブル

糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話
領域横断による読み解き
〈社会福祉学・重症児教育学・教育人間学・文化人類学〉

・ 京都学派教育学から読み解く「生産性」

2021/08/25 (Wed.)

金沢星稜大学・講師
門前 斐紀

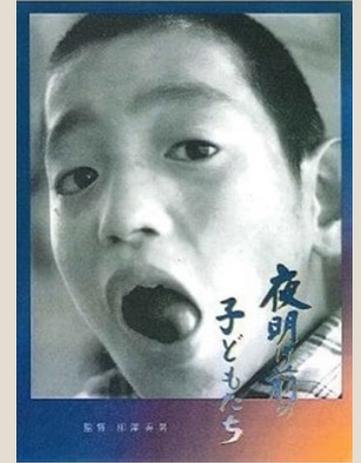
本発表の目的

- ・糸賀一雄の「生産性」の議論について、思想的つながりのあった教育哲学者・木村素衛（もともり）の「形成（性）**Building・Formation**」概念を導きとして再考すること。
- ・京都学派の生命思想を継承する木村教育学の「**形成作用**」から、糸賀の社会関係論が示す「**物をつくるということ**」を通じた「**社会的な広がり**」について考察すること。



木村素衛（1895～1946）

発表の内容



①思想家の紹介

②論点1 「表現」と「形成」（文献記述の読解）

- ・ 木村素衛の形成論
- ・ 教育学のキーワードとしての「形成的自覚」

③論点2 「形成」論から「生産（性）」を再考 （療育映画「夜明け前の子どもたち」）

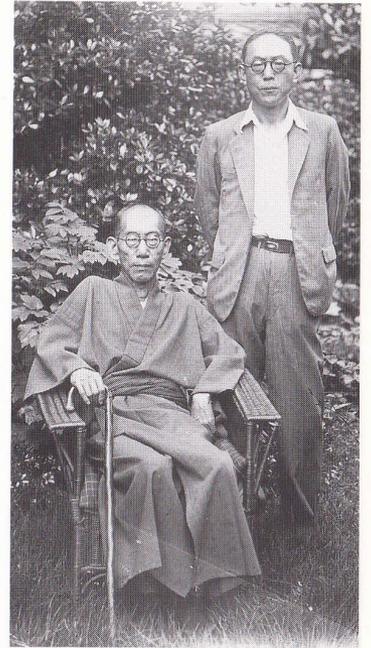
- ・ 子どもたちの「生産的な姿」
- ・ 道具的なものとの関わり

④まとめと課題

京都学派の教育哲学者 木村素衛 (もともり)

- 1895年石川県江沼郡橋立村（現：加賀市橋立町）生まれ
- 幼少期に家業（北前船）が廃業、父親は北海道、一家は京都へ
- 1916年（21歳）肋膜炎再発で第三高等学校を退学、闘病後、24歳のときに西田幾多郎の元を訪問し、聴講許可を得る
- 1920年（25歳）京都帝国大学文学部哲学科選科入学、大谷大学講師を経て、1929年広島文理科大学哲学講師となる
- 1933年（38歳）西田の勧めで美学・哲学研究から教育学研究に転向し、京都帝国大学へ赴任
- 学生時代からのフィヒテ(1762-1814) 研究をまとめつつ、京都学派の哲学を軸としてドイツ観念論や文化教育学を批判的に継承
- 美学・哲学・教育学を通底する表現論を展開し、教育という営みの構造や異質なもの同士の関係性について原理的に探究

糸賀一雄は、代用教員時代に池田太郎とともに木村の元に通うようになり、
木村の晩年まで交流を続けた



1944年頃
西田幾多郎先生(左)と著者
(鎌倉の西田宅)

※木村（1997）
より転載

Cf.

「身体的自己」の形成と「世界」の自己形成の相即
～西田幾多郎「論理と生命」（1936年）の形成論

「我々は道具を以て物を作ると共に、物を見て行く、行為によつて直観して行く。直観といふことは形成することであり、創造することである。斯く云ふのは、世界を主観的に考えることでなく、我々の身体的自己が世界の作業的要素なることを意味するのである。…中略…世界が世界自身を形成し行く形成作用である。」 【西田2003：65】

- 西田哲学は、「行為的直観」をキーワードとして独自の形成論を展開した。ここでは、「身体的自己」が「世界の作業的要素となる」という、自己と世界の形成作用の相即が議論されている。
- そうした「身体的自己」と「世界」の形成的な相即では、「作ること」の能動性と「作られること」の受動性が同時生起する。「行為的直観の立場に於ては、世界は表現的となる」、「世界は生命の表現となる」。

→木村の形成論（表現論）は、こうした西田哲学の「行為的直観」論とあゆみをともした

①

「形成（性）」に関する記述

『表現愛』（1939年）序文～「表現」の定義

「表現と云うとき、この書に於ては私はそれを広い意味に理解している。単に内的生命の身体に於ける直接の発動や或は言表に限らず、また作り現わされたものとしての様々な制作物や所産に限らず、これらを含み入れて更に一層具体的包括的に、凡そ何ものかを作り現わすことに於てみずからの存在を具体的に維持して行くような生命のはたらきを、表現として理解しているのである。」

【木村1997：8】

→ここでの「表現」とは、具体的な関係性のうちで物事が作り現されて行く生命的な働き（「内」「外」の相互変容）を指す

→「凡そ何ものかを作り現わすことに於いて」維持される「存在」の在り様に注視・傾聴することは、関係論的、生命論的な人間変容の視点となる

『表現愛』序文ほか～「形成」の記述

「表現が人間的存在の本質を成し、そして表現とは何はさて措（お）き内なるものを外へ形成し現わすことでなければならないとすれば、道具や機械が表現に取って如何に重要な役割を担うものとして登場して来なければならないかは明白でなければならぬ。またこれと必然的に連関して身体と技術とが、ここにみずからの真に本質的なそして最も具体的な意味を現わして来なければならない。」

【木村1997：9】

（主体が自らに向かって「語り伝え、語り渡」される環境へ応答しながら「表現のアイデア」を限定して行く、という流れで）「アイデアは内から外へ表現的に形成し出だされることに於て初めて真実に見られるのである。表現的生命に取っては見るとはその本質に於て作ることであり、その他に見ると云うことは成立し得ない。…中略…アイデアを真実に見ると云うことは単に精神的に見ることではなく、却て身体的に見ることでなければならない。」

【木村1997：24】 『身体と精神』 1938年

→「形成」とは、『表現愛』序文に示されるような「表現的存在」が、「内（表現的主体）」から「外（表現的環境）」へ身体的、技術的に働きかける動きを捉える言葉

→「個（体）」としての個人の形成作用の周縁を、多層的に捉え直す思想

「個的主体（自覚的個体）」の形成作用を介し、



「内（**表現的主体**）」「外（表現的環境）」相即
（に伴う「**障碍（断絶・飛躍）**」）
を契機として「表現のアイデア」を作り現わす、

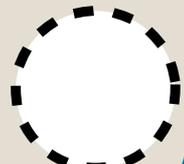
「**表現的生命**（表現的形成的存在）」

= 3層構造の人間（主体性）理解 =

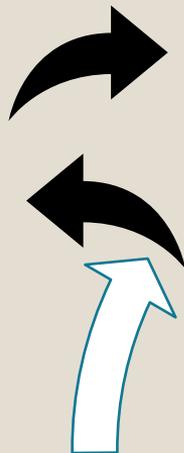
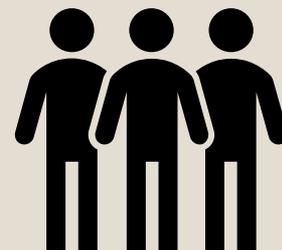
【大西2011：132-139】

「表現的主体」
(「外 (表現的環境)」との対話)

形成作用 (形成性)
(諸々の矢印)



「自覚的个体」
「個的主体」



「表現的生命」

「形成的自覚」～教育学のキーワード

- 木村は人間「形成Bildung」を「可塑性・陶冶性Bildsamkeit」の議論と重ね、「形成的自覚の徹底」の学問として教育学を構想した。
- 教育の対象は、「みずから自覚的である可塑性」として「陶冶性Bildsamkeit」を持つ人間である。教育における形成作用は、「彫刻家が大理石に向って形を与えると同一に於て形成的であるのではなかった」【木村1948：125】。

「絶対的生命のうちに在つて内部からこれを照らし自覚的にこれを賛け育成することが**自覚的個体**としての人間の文化活動の本質的な意味でなければならないとすれば、かくの如き自覚的個体を育成するところの教育は、天地の化育を賛けるものを賛け育成するものとして、形成的自覚の徹底にほかならないのである。」

【木村1946：124】

→「**形成的自覚**」とは、文化的な関係性のなか、自らに委ねられた「**表現的生命（絶対的生命）**」を自ら引き受け、現し出し、「自覚的個体」となっていくこと

→教育は、そのように「天地の化育を賛く」他者の「形成的自覚」を賛助する営み（中国古典・中庸の一節を西田哲学の教育論から継承）

糸賀一雄の社会形成論

～広義に「物をつくるということ」の生産性

「これは家庭でも、学校でも、施設でも、精神薄弱者または精神薄弱児が社会的な広がりをもってくるその手がかりとなるものは、具体的にはなにかということ、物をつくるということである。物をつくるということをとおして以外には、私たちは社会的な広がりをもつことはできないと考えてもいい。」

「そのつくるものはその発達の程度に応ずる」「また指導の技術にも関係する」
【糸賀1982b : 313】

→画面の片隅に非常に小さい固い絵（関係性を受けて広がって行く）、まっ白い紙に蠟でなぐりがきしたうえに紺色で鮮やかに染色（うちわやカレンダーに使い共有する）

→「つくったものが社会性をもつ」ことによる、
根本的な関係性の「変化」「喜び」「自信」

背景に京都学派の生命思想を汲む木村の「形成」論

②

「夜明け前の子どもたち」
～子どもたちの「生産的な姿」



※DVD「夜明け前の子どもたち」（1968年）付属パンフレットより転載

『愛と共感の教育』（1972年）

～画一的な競争原理を脱した教育論

「**生命ぎりぎり**のところゆさぶりをかける教育、そういう教育もあるというところから、私たちはもう一度、現在の競争のなかで奔走している教育の世界を見直さざるを得なくなります。」

【糸賀1972：126】

→障害を持つ子どもたちが、身体的な制約や限界を介してなお、むしろかえって、環境（「外」）からの「**障碍**」による「**否定性**」を契機として、形成作用を繰り出す動きを捉える言葉

→「**形成的自覚の徹底**」としての教育の道行に、「**否定性**」を含み込んだ固有な試行錯誤を見出し、「**生産（性）**」を見取っている



「形成（性）」を担う道具

～「第4章 教育における生産性について」

- 「療育カメラ」：カメラが子どもと同じ目線で生活をともにし、問題提起を行い、課題を共有する媒体となることで撮影された「**肉眼では到底とらえることのできなかつたような、なまな、いきいきした、生命いっぱい、生産的な姿**」。
 - 「五月の鯉のぼり」：第二びわこ学園東病棟における、子どもたち自身の手で鯉のぼりを上げる試み。子どもたちはスタッフに担がれながら、手に鯉のぼりを握りしめ丘を登る。
→鯉のぼりと一緒に地面に寝転び、包まれ、抱きしめ、顔をすり寄せる様子。「いつも首を床につけている子どもが**おのずと縦に視線が行くよう**」計画された活動（ものの見え方、「表現的世界」の自覚）。
 - 「**こころの杖（魔法の杖）**」ほか手作り道具：野洲河原から子どもたちの手で石を運び、第二びわこ学園東病棟の庭にプールを作る試み。
→缶に石を入れ、坂道混じりの道程を往来する「石運び学習」で、**参加困難な子どもが自らを支えるような個性的な道具**が登場する（Uくんの「紐」、女兒の「ほうき」）。
- いずれも、学習参加や集団的活動に困難を抱える子どもが“そこに在ること”を支える、ふしぎな道具使い

道具の「離身性」「代用可能性」「公共性」

～木村教育学における「形成（性）」の伝達と拡散



道具による主体と環境の「仲立ち」

- 「身体の最も重要な本質」は「形成性」であり、身体は「精神の自己否定であると同時に物質の自己否定※」の「矛盾の自己同一」ゆえに「形成の能力」をもつ。
- 技術は身体の「延長としての道具に於いて」発揮され、道具はその際、身体性を拡張的に伝達する「仲立ちとしての手段」となる。

※「物質的自然の一部分として自然に属し」つつ同時に「主体に属し、内なる意志に従って動き意志を実現する」という両義性のこと

→異なる「身体的存在」の間で、道具は形成作用や、その技術の「仲立ちとしての手段」となる。

→道具や身体の道具性が、探索的な仕方で主体と環境の「仲立ち」をする動きのなかに、物事を作り現すことによる「社会的な広がり」の「生産（性）」が見取られる。



社会功利主義的な生産論を超えて

身体の「道具性と技術性」への注視
(木村教育学の「自覚的個体」の位相)

道具の「仲立ち」に傾聴
(「表現的主体」の位相)

社会の変容
(「表現的生命」の位相)

- 身体の道具性や事物としての道具が、「**障碍**」「**否定性**」に惹起された「**形成性**」を技術的に「仲立ち」するという木村の形成論（背景に西田哲学の「行為的直観」議論※）が、糸賀の社会形成論に影響を与えている。

※「物は生命の表現となる」「世界が自己の身体となる」【西田2003：67】

- そうした脱自的、ままならない動きを介する「生産（性）」の現れを見据え、糸賀は社会を覆う「**实用主義**や**功利主義**」下の価値を批判した。

まとめ ～ 「生産（性）」をめぐる対話

京都学派の生命思想を汲む木村教育学の「形成（性）」概念から糸賀の「生産（性）」を再考すると、“生産的であること”の意味が以下2点から捉え直される。

- 子どもたちの「**生産的な姿**」は、異質な立場や異なる「身体的存在」同士が“ともに在ること”の困難さ（場合によっては固執性、拒絶、強迫等）を、固有な道具（的なもの）の「形成（性）」によって乗り越えようとする側面に見出される。
- そうした「**生産性**」は、主観的立場から経験される過程や成果それ自体というよりも、糸賀の言う「物をつくるということ」を通じた「社会的な広がり」から個々の在り方や関係性が変容する側面と解される。

→ 広義に「物をつくるということ」を通じた関係性の変化から、
新たに“できること”や“可能となること”を探り合い、
育む機会を引き出す教育

ご静聴ありがとうございました



チューリップ（木村素衛）

参考資料・引用文献

- 秋浜悟史（脚本）・瀬川順一（撮影）・柳沢寿男（監督）「夜明け前の子どもたち」財団法人大木会心身障害者福祉問題総合研究所、1968年
- 大西正倫『表現的生命の教育哲学 木村素衛の教育思想』昭和堂、2011年
- 糸賀一雄『福祉の道行 生命の輝く子どもたち』中川書店、2013年
- 糸賀一雄（糸賀一雄著作集刊行会編）『糸賀一雄著作集』第1-3巻、日本放送出版協会、1982ab,1983年
 - －『愛と共感の教育』柏樹社、1972年
- 木村素衛『表現愛』こぶし書房、1997年
 - －『形成的自覚』弘文堂、1941年
 - －『国家に於ける文化と教育』岩波書店、1946年
 - －『教育と人間』弘文堂書房、1948年
- 西田幾多郎「論理と生命」『西田幾多郎全集』第8巻、岩波書店、2003年
- 西平直『教育人間学のために』東京大学出版会、2005年

参考資料・引用文献

- 森田伸子「京都学派における『形成』概念の諸相と教育 西田・三木・木村を中心に」小笠原道雄・森田尚人・森田伸子・田中每実・矢野智司『続 日本教育学の系譜 京都学派とマルクス主義』勁草書房、2020年、89-155頁
- 門前斐紀『木村素衛「表現愛」の人間学 「表現」「形成」「作ること」の身体論』ミネルヴァ書房、2019年
- 矢野智司「近代日本教育学史における発達と自覚」『近代教育フォーラム』教育思想史学会、2013年、第22号、101-110頁
- 渡部昭男・國本真吾・垂髪あかり（編）『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』三学出版、2021年
- C.ヴルフ（今井康雄・高松みどり・藤川信夫訳）『教育人間学へのいざない』東京大学出版会、2015年